



いまこゝに甦りノ猛虎魂

よみがえ

文  
村山実

# The Tigers

その、歓喜の一瞬……わがタイガースの戦士たちが、こぼれるように笑顔をふりまくのを見ながら、なぜか私には、一人の男の顔がフツと浮んだ。

江夏豊である。

——あの時、あの顔以来の「タイガース魂」をみなぎらせた男たちの顔に、私の血はたぎった。こいつらは、見事に命脈つきようとしていた「猛虎魂」を甦らせてくれたのだ！  
あれは昭和45年10月12日の甲子園、対巨人

戦だった。タイガースは巨人を半ゲーム差に追いつめていた。試合は3-1とリードして迎えた7回、マウンド上の江夏は一死満塁の大ピンチに立った。

打席には王がいた。そのとき私は兼任監督

前日に3-0と巨人を完封していたのだが、頼りのエースが苦境に落ちた以上、リリーフの準備をした。

江夏はたちまちにして王をカウント2-0に追い込み、3球目を外角低めにズバツと快

速球。王が手も足も出ないほどの球であったが、主審谷村の判定は非情にも「ボール」。みるみる江夏の顔が真っ赤になっていく。誇りと自信が傷つけられた時、投手はマウンド上で「ガラスの心臓」に変化してしまいうものだが、私には江夏の怒りが手にとるようになっていった。

江夏は、同じところに、同じストリートを意地になって続けた。いずれも判定は「ボール……」。王は結局、四球となり、押し出しの

1点。続いて打者は長島。江夏はその長島に對しても、徹底してストリートを配していった。長島のバットが金属音を残し、打球は左翼へのライナー。逆転決勝タイムリーとなつてとんだ。

唇をかむ。目は血走っている。そのまま江夏はマウンド上に両ヒザをつき、崩れて、すわりこむ。

この瞬間に、あのシーズン、あと一步まで巨人を追いつめたタイガースのVは、音をた



てて崩壊していった……。

だがしかし、私は妙に「悲しさ」はなかったのだ。それは、江夏豊が、シーズンのチームの運命がかかった場面で、天下のONを打席に迎えて、一球たりとも逃げることをしなかったことにある。江夏ほどの男だ、ピッチを断つテクニクはある。ごまかしもさくのだ。しかし、彼は、自らのウイニング・シヨットを「ボール」といわれた怒りから、あえてもう一度挑戦していった。

それは、勝ちさえすればよい……という精神なら、むしろこっけいなことかもしれない。だが、私は思う。伝統のあるタイガースの一員としての誇りがあるのなら、そこで逃げたはならないのだった。だから、江夏は、グイグイと速球一本やりてON砲に対し、結果は玉砕していった。

人はこれを「負けちゃあしようがない」というかもしれないが、実は、これこそ「タイガース魂」そのものなのであった。

いつ、いかなるときでも、誇りを失わず、戦いを挑む……。それはときとして、惨めな結果に終わるかもしれないが、そんなことをおそれているような男は、タイガースの本当の戦士とはいえない。

崩れる江夏に、私はヤケドをしそうな「炎」を見た。

その「炎」が甦ったのだ。

掛布がいた。岡田がいた。真弓、池田、中西、バース。まさに炎の男たちの描いてくれた21年ぶりの饗宴に、私も酔った……。

私は37、39年と、幸せなことに2度優勝の瞬間に参加できた。当時、私と吉田監督は、投、打の柱として競い、共に闘った。私がピッチに立つと、吉田さんはすぐマウンドに駆け寄り「ムラ、空を見る、空を……」と、ひと呼吸おくことをすすめてくれたし、再三のファインプレーで救ってくれた。逆に私は、吉田さんのたたきだした貴重な1点を必死で守った。

世評ではライバルとして見るが、こと、勝

つことに関しては、われわれは「炎の軍団」と化し、そんな低次元のことは考えもしなかったのである。

われわれは、あの37、39年のときも、常にチャレンジヤー精神を忘れなかった。以後、21年間、なんと長き「空白」があったことか。しかし、私の監督時代（45〜47年）も、吉田さんの最初の監督時代（50〜52年）も、いや、多くの指揮官が、けっして、はじめから諦めて戦っていたわけではない。誰もがタイガースの伝統という十字架を背負い、血を吐く思いでチャレンジしていったのだ。

苦しかった。タイガースを愛する者の一人として、たとえ野にあっても、思いは同じである。20年間も、栄光から見放されていた屈辱……。私はテレビや新聞の解説で、あえて阪神につらくあたった。すると熱心な阪神ファンから「おまえは巨人のひいきをして阪神に冷たいではないか」とかなりのクレームがついた。

誰がタイガースよりも巨人が好きだ……なんて思っているものか。タイガースは、私にとって血であり肉であり生命だ。掛布や岡田、中田、中西、池田、佐野、北村、吉竹……、みんなわが後輩であり、わが子のようなものである。

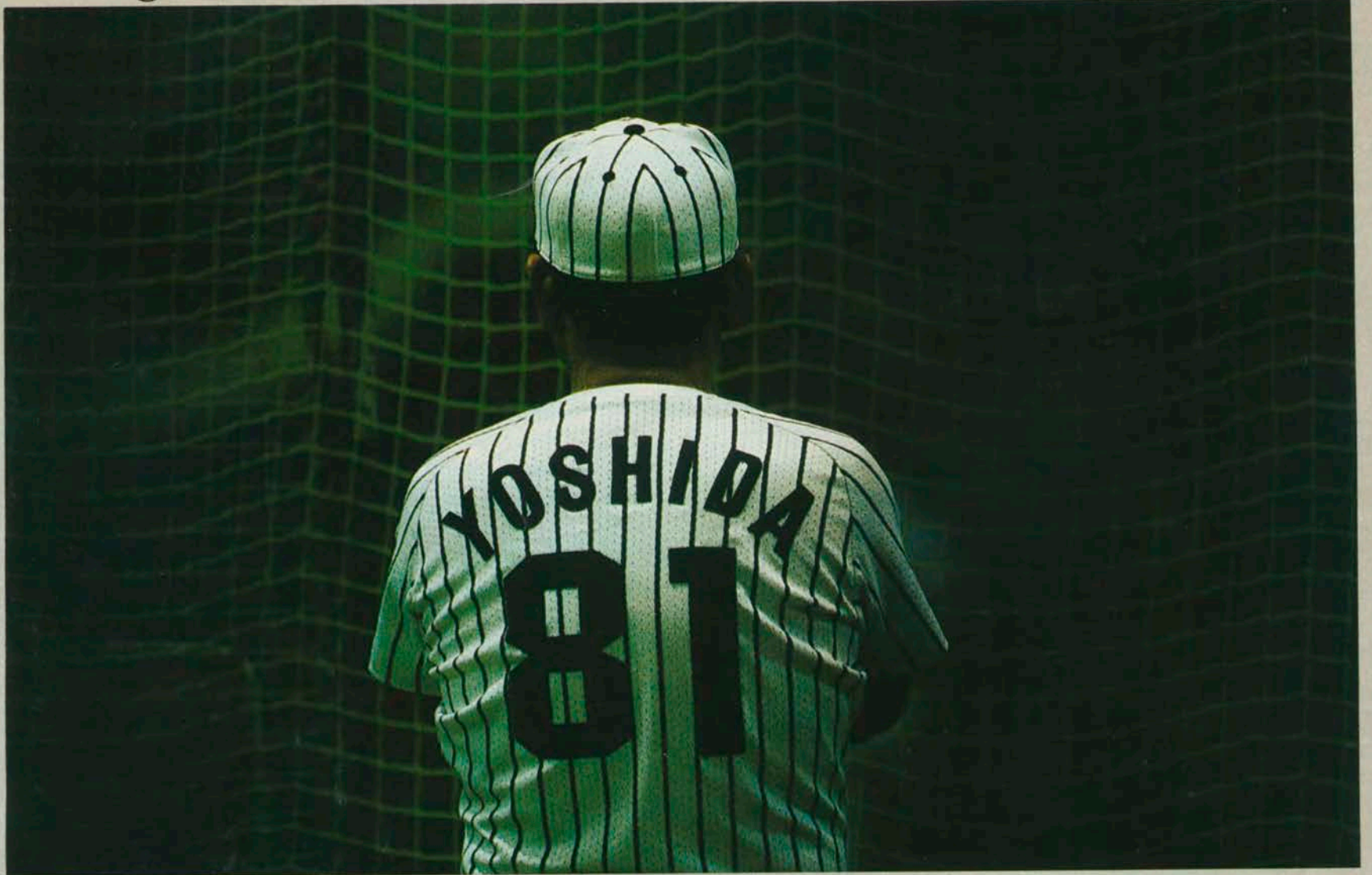
わが子なりやこそ、厳しいこともいうのだ。他人サマの子供だからこそ、平気でほめられるのである。この心理は、今季、チームの指揮をとり、慎重に、かつ、選手に厳しく注文をつけていった吉田監督も、まったく同じだったと思う。

今年のタイガースを、私はシーズン当初、3位と予想した。あまりにも戦力面で投手力に不安があったからである。安芸キャンプを取材したとき、吉田監督から「若手投手陣をちよつと見て欲しい」といわれた。世間では「意外」と受けとったようだが、いわゆるチーム一丸となるには、本社、フロント、現場そしてOBも含めてのチームワークなのだ。吉田さんはい。これこそ「土台づくり」の

昭和37年、39年の優勝では、村山氏とともに投、打の柱として活躍した吉田監督。21年ぶりの栄光である

M.Kemmisaki





現役時代の背番号は23。名遊撃手にして、オールスター連続13回出場という記録を持つスター選手だった

原点であろう。

私は意気を感じた。と同時に、実際に若手投手陣を見て、こりやあ米田コーチは苦勞するぞ……と思った。実際、このピッチングスタッフでは、ペナント・レースの荒海を乗り切るには、あまりにも柱が細すぎた。

それを支えたのは、山本・中西のダブル・ストップである。ベテランと若手をかみ合わせたリーグ唯一の左右ストップ・システムは、首脳陣の苦肉の策から生まれたとはいえ、最大のヒットだった。

また、不調なものを惜し気もなく二軍に落とし、逆に好調なものはルーキーでも大胆に登用していった。その新陳代謝こそ、弱体といわれた投手陣に、一本の太い精神注入棒の役をはたした。カンフル剤を常に投与し続けたベンチの苦勞も忘れてはならない。

ベースと岡田……。なるほどこの2人はよく打った。無条件である。だが、私は、その2人にサンドイッチ状にはさまれて、黙々と働いた掛布雅之に、黒光りする「タイガース魂」の血脈を見る思いがした。あまりにも、シーズン途中に前後の2人が派手に打つために「四番打者」掛布の存在感が希薄になっていった。夏場から9月中旬にかけて、いわゆるペナントの「心臓破りの丘」の段階にかかって、掛布にチャンスが回ると、スタンドはタメ息まじりだった。強烈なカケフ・コールに、それはかき消されていたが、チャンスに弱い……という思いが、ファンの意識の底に漂っていたのだ。

背中にそれをうけながら、終盤のホームストレッチにかかって、掛布は俄然、自ら「主役」の座を捨てた。脇役に徹したのだ。

つまり、強引にホームランをねらわず、進塁打、効率のいいヒット、そして、出塁する（四球）ことを心がけている。えてして、派手なホームランが目立った今年のタイガースだが、ここぞというときの掛布の「身を捨てた打席」に、私は、彼の胸のなかの炎を感じたのである。

「とにかくボクは、優勝してみたいんですよ……」

昭和11年、タイガースはうぶ声をあげて以来、巨人のライバルとして球史を飾った。洲崎の3連戦で、巨人・沢村の前に牛耳られたタイガース打線は、景浦、松本、藤村ら、伝説を生んだ猛者たちが、日本プロ野球史上、初めての「特訓」をやり、翌年、沢村をこっぴどみに打ちくだるのである。

以来、タイガースの歴史は、殴られたら殴りかえす！ この、男たちの哲学が支配した。藤村富美男さんにあこがれ、甲子園にあこがれた多くの若者と同じように、私がタイガースに入り初めてマウンドを踏んだのは、昭和34年3月2日、そのミスター・タイガース藤村富美男さんの引退記念試合だった。初めて対した打者が川上哲治さん……このドラマチックな「出逢い」こそ、タイガースへの未だに熱いノスタルジーの出発点だったのである。

幸せなことに、私は14年間のタイガースの生涯に、永久欠番「11」をいただいた。

これは、いいかえると「村山実よ、タイガースを永久に忘れてはならぬ」ということであらう。いわれるまでもなく、忘れるわけはない。だが、私が引退してからもタイガースの苦難は続いた。江夏がいて、田淵がいて、彼らも志なかばにしてチームを去っていったのである。

何だか、プツンと音をたてて糸が切れていくような思いだった。やがて掛布が台頭した。岡田がデビューした。

そして、今、やっと長い遠い道に灯がともった。火をともしたのは、吉田監督を中心としたタイガースの戦士たちである。だが、ここまで、暗く苦しい道を、必死で支えてきた多くの男たちの歴史もまた忘れてはならない。タイガース魂を、血と汗で守り続けた男たちを……。私はいま、感激の渦のなかで、そのことを強く思う。わがタイガースの「灯」は再び燃えあがる。

タイガースよ、ありがとう、ありがとう。